〈寄稿〉鎌倉朝日500号に寄せて

気軽に交流できる場として

渡邊武二（鎌倉市・73）

2009年1月号から3年間「プロムナード」を担当した、渡邊です。

当初はこんな内容でいいんだろうか、これを書いてはまずいのではと逡巡の連続でした。そして、落ち着いたのが身の回りのこと、経験したこと、鎌倉での市民活動などを中心に書くことでした。

300字ちょっとの字数でまとまったことを書くのは難しいことでした。字数を稼ぐために「ですます調」はやめ、「である調」で統一してみましたが、読み返すとしっくりこない。必然的に「体言止め」を多用することになってしまったものです。「プロムナード」の執筆は、私に文章修行の機会を与えていただいたものと感謝しています。

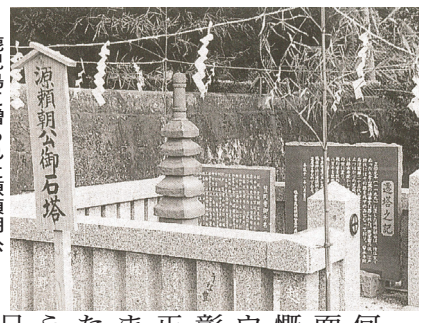
取材と称して市内を歩き回りました。当時上映されていた映画「桜田門外の変」を見た後、襲撃に参加した水戸藩士の墓を探しに鎌倉大町の上行寺に出かけたり、韓国の済州島の旅行記事で、読者と話をすることができたり、楽しい時間でした。

鎌倉朝日は、創刊以来の読者です。これからも、市民の声を丁寧に拾い、情報のプラットフォームとして、気軽に交流できる場としてあり続けてほしいと思っています。

感慨深い鎌倉朝日500号

松中健治（鎌倉市・78）

私が鎌倉市議会議員になってすぐ、朝日新聞本社販売部から「鎌倉に販売店を増やしたい。販売店が協力する地域のサービスとしてミニコミ紙を発行したい」との協力要請があった。以前、私は朝日新聞専属の広告会社に勤めていた。新店舗は父の不動産会社がお世話し、私は当時の朝日新聞鎌倉支局長中村藤一郎氏と鎌倉朝日創刊に協力し創刊記念パーティーにも出席した。



鹿児島に贈られた源頼朝公複製供養墓塔

500号発行は、何かと縁がある紙面を思い出し、感慨深いものがある。ウォーナー博士の顕彰碑の建立を藤沼正人編集長から頼まれたことがあった。戦後、GHQからウォーナー博士を日本各地に案内するよう民俗学者柳田国男氏に要請があった時、担当したのが妻の父・大藤時彦（元日本民俗学会会長）であった。その縁もあり、私も協力した。場所は鎌倉駅西口広場、ここには先に、旧鎌倉駅時計塔建立がJCの協力で実現していた。

1999年10月、鹿児島・薩摩島津家に鎌倉市民有志（大三輪龍彦代表）が源頼朝公複製供養墓塔を寄贈し、島津家ゆかりの鶴嶺神社に安置された時、中村藤一郎編集長と市民号に同行して鎌倉朝日に紀行文を大きく掲載して頂いた。後に鎌倉の源頼朝公供養墓塔、北条義明法華堂跡一帯の地は島津家、毛利家から鎌倉市に無償で寄贈受けることが実現。現在その地は国の史跡となっている。

妻の母大藤ゆき（『鎌倉の民俗』の著者）が鎌倉朝日に3年にわたりエッセイ『昨日の鎌倉』を連載したことも懐かしい。

ロジュマンの今と昔

佐藤公正（鎌倉市・76）

「鎌倉朝日」の創刊号が手元にある。1面トップ記事は、鎌倉ロジュマン（岡本）の自治会活動を紹介する特集だった。

長文の記事から、ざっと半世紀前という時代の空気が伝わってくる。

当時、私は紹介された活動の末端にいた。記事が注目した「仮住まいマンションを脱して真のコミュニティ＝わが町へ」という新しい試みは、その後どう展開したのか。

マンションが分譲されたのは1976年秋。全4棟557住戸。記事によると、湘南屈指の高級マンションとして話題になった。記事の中心になる自治会の設立は難航。「建物・施設を管理する管理組合があれば自治会なんて要らない」という反対論と「資産管理だけでは住む人の連帯感がつくる快適なコミュニティは生まれない」という推進論が激突。多数を争う激論が1年余も続いた。

特集記事では、やっと誕生した自治会のもとで子供会に次いでシニアの親和会が結成されて市長らがお祝いに駆け付けたと伝えている。餅つき大会、ダンスパーティから各種同好会まで交流の場が相次いで生まれた。初代の自治会長が紙面で夢と語っていた「ロジュマン祭」もその後、近隣も巻き込んで実現した。

しかし今日…かつて250人を数えたロジュマンの小学生は20人前後に。この10年来、少子高齢化に対応した管理に重点が移った。同好会も野球やテニスに変わって、グラウンドゴルフや俳句の会がサロン活動として装いを新たに。

時代の波頭にさらされて「わが町」は、先人に習い新しい知恵を生む論議が待望されている。

500号発刊を慶ぶ

中村　喬（藤沢市・81）

1979年の創刊、世の中がインベーダーゲームで盛り上がっていた頃である。40余年の長きにわたって私の心をとらえ続けたものは豊かな情報量である。日頃目にする情報紙は多いが「鎌倉朝日」のそれは群を抜いている。地域の政治や経済そして文化や暮らしと掲載される記事は多岐にわたる。しかも、質が良い。いくつかの連載をはじめとして十分に吟味された記事が並ぶ。その都度感心すると共に編集に携わる皆さんのご苦労を想う。

また、節度を保った広告の量と姿にも好感が持てる、営業面の苦しさは想像するに難しくないが、読み手としては有難い配慮だ。

私は「鎌倉朝日歌壇」の投稿で楽しい場をいただいている。読者としてだけではなく、直接紙面に関われる機会があるということも大きな魅力だ。毎月1日、私はまずこの欄に目をやってからおもむろに1ページに戻る。掲載された記事の中から短歌作りのヒントを得ることもしばしばである。「鎌倉朝日」は私の生活に確かな形で位置づいている。

「扇三態 笑う・よそ見・つくろい」

鎌倉で創作活動

竹鶴寿男（鎌倉市・80）

2013年5月1日号、6月1日号に、作品紹介と、鎌倉芸術館での作品展の記事を掲載していただきました。

頼朝の兄、頼光を先祖とする私達一族が、1530年代に鎌倉に住んだと記述のある家系図を、近所に住む史述家が調査してくださり確認したと伺いました。そんな縁を確かめもせず、東京生まれの私が鎌倉に住んで20年が経ちました。

20代から50代までは、日々の生活に直接関わる品々をデザインする仕事をしていました。50代後半からは、人の営みや、社会の変遷に拘わらず不偏と思える、事や物を求めて、彫刻や絵画の制作をしています。

鎌倉の自然は、強靭さ、絶妙のバランス、美しさ、そして、いかなるものにも阿ることのない生の在り方を教えてくれます。

どんな言葉も撥ね除けて屹立するような作品を創りたいと、毎日制作をしています。才能の無さを痛感しながらも、毎日欠かさず創るからこそみえてくるものがあることを信じて…。

文学つれづれ ⑱⑥

吉川英治『宮本武蔵』（上）

赤羽根龍夫

宮本武蔵は吉岡一門との決闘の後どうした行動をしたのだろうか。

多くの論者が考えているように武者修行の旅に出ていたとは考えられない。武者修行の旅に出ていたら当然、吉岡の門弟は仇討を考えたであろう。その場合、今度は自分達で奇襲をかけ、弓や鉄砲で狙うか、手槍や脇差を同時に投げつけるなど武蔵が策を巡らすことが出来ない方法をいくらでも使うことができた。

「初代刈谷藩主　水野勝成展」のチラシ（2019年刈谷市歴史博物館で開催）

しかしそのような仇討さわぎが起きたという話は一切ない。なぜか。その理由を伺わせる資料が決闘の4年後の慶長13年、武蔵が徳川家康の従兄弟の水野藩主・水野勝成に発給している『兵道鏡』である。つまり武蔵は吉岡一門との決闘の後しばらくして水野藩で円明流の剣術師範になっていたのである。

勝成は弱年から槍を持っての戦場での働き目覚ましく、鬼日向と恐れられた。一時、父の勘気を受けて21歳から36歳までの15年間各地を放浪し、関ケ原の前夜、勝成の才を惜しんだ家康の指示で和解し、関ケ原の後、父の遺領、刈谷（愛知県刈谷市）三万石を継いでおり、武を重んじ関ケ原で敗れた武蔵の経歴を問題としないで、決闘の評判を耳にして武蔵を剣術師範によんだのであろう。これならば吉岡一門も手を出せない。この後も武蔵は水野藩と深く関わっていくことになる。

慶長20年の大阪夏の陣の時に、水野藩の家老であった小城家文書の中に34歳の武蔵の名前が見られる。水野藩の軍勢に勝茂の嫡男の警護役として武蔵の名が記されている。このときの武蔵の活躍が尾張藩の書物奉行であった松平君山の『黄こう雑記』の中に記録されていた。

5月6日、後藤又兵衛も討ち取られた大坂方は真田幸村軍が殿となって退却、それを追って水野軍は追撃した。その戦いで武蔵が大木刀を持って逃げ遅れた雑兵を左右になぎ倒していた姿が目撃され、その戦いぶりは見事であると称賛されている。

戦いの後、水野勝成は大和国郡山六万石に転付。武蔵は故郷の播磨に帰った。その際、刈谷の水野藩で親交を持った槍奉行の子中川三木之助を養子にしている。

三木之助は大坂夏の陣の2年後の1617年（元和3年）、姫路に入国した本多忠政の嗣子・忠刻に児小姓として従った。当時14歳であった。中川志摩之助は親元を離れて遠国に行く我が子の後見を、故郷の播磨に帰った武蔵に託したのだと思われる。

三木之助の知行は7百石であり忠刻の剣術師範も勤めたが、やがて致仕（辞職）して江戸に出た。忠刻に寵愛されたので妻の千姫の嫉妬のため暇を出されたと言われている。その後、忠刻が部屋住みのまま31歳の若さで病死したとき、三木之助は姫路に帰る途中武蔵に別れを告げ、墓前で追い腹を切り殉死した。今も姫路郊外の円教寺にある本多家霊廟に三木之助の墓があり、墓碑には次のように記されている。

「宮本三木之助　宮本武蔵の養子　忠刻が卒すると墓前に於て切腹　伊勢の生まれで武蔵の養子　当時23歳」。三木之助に死なれた武蔵は、実兄の次男15歳の伊織を二番目の養子とした。

昨年の夏、私は名古屋近郊の刈谷を訪れた。折りしも刈谷民族博物館で「初代刈谷藩主　水野勝成展」が開かれていた。刈谷と武蔵との関係を示すものは勝成所用と伝わる武蔵の円明流で遣う長さの一尺六寸の脇差しかなかったが、いつの日か刈谷に武蔵がいたことを示す事績が発掘されることを期待している。

（神奈川歯科大名誉教授）

自由投稿

"Taiwan can help, and is helping"

台北駐日経済文化代表処 代表処横浜分処 処長　張淑玲

4月下旬、当処あてに横浜市内の特別支援学校に通う児童の保護者より一通の手紙が届いた。

台湾政府から日本へ寄贈されたマスクが学校にも配布され、安心して学校に通えるようになったと御礼の言葉が綴られ、手作り布マスクも添えられていた。それを見た私は胸が熱くなった。

近年、台日関係はより一層緊密になり、数々の災害時に相互扶助をする「善の循環」が形成されている。その一環として当処は我が政府を代表し、医療物資を鎌倉市などへ寄贈した。そして、鎌倉市等との友好議員連盟が「台湾の世界保健機関（WHO）、国際民間航空機関（ICAO）参加」支持の公開声明を通過し、鎌倉市においては議会決議案としても可決された事に感謝する。

新型肺炎が世界に感染拡大する中、我が政府は先手の防疫政策で封じ込めに成功し、これまで200日以上国内新規感染者は0で、各国から高く評価されている。

また日本をはじめ各国にマスク5100万枚、防護服60万着、検温器3万5千台を寄贈し、「Taiwan can help, Taiwan is helping」（台湾は国際貢献できる意欲と能力を持っている事）を表わした。

防疫と国際安全ネットワークに地理的国境はない。空白は決して生じてはならず、政治的理由で台湾2300万人を排除することは不当である。引き続き台湾のWHO及び国際刑事警察機構（ICPO）などの国際組織参加への支持を切に願う。

鎌倉に台湾から医療物資を寄贈＝6月